



「伝えたい木の文化、残したい美しい森」
（美しい森林づくり推進国民運動）

高島屋グループの 美しい森林づくり

高島屋グループは社会貢献活動として多様な取組を展開しており、分収造林契約を通じて、国有林の企業の森づくりに参画しています。また、社内ボランティアが活動主体となる植樹・育林活動を行い、地域では環境保全や緑化活動にも参画するといった、幅広い活動を行っています。今回は高島屋グループの美しい森林づくりの活動についてお話を伺いました。



分収造林地の
植栽前(平成5年)と現在



高 島屋グループの森林づくりへの取組は、平成四年にまで遡ります。高島屋スペースクリエイティブ株式会社（旧高島屋工作所）が、社

員の提案により、企業の社会貢献事業として苗木の募金活動を開始しました。そして、この取組が、翌年には東京営林局浜松営林署（現在の関

東森林管理局天竜森林管理署）管内における国との分収造林契約を通じた企業の森づくりへとつながります。

分収造林の対象となった区域は静岡県浜松市の奥浜名自然休養林内の国有林で、一年目に二・二五畝を、二年目に〇・九三畝の植栽を行い、合

計でヒノキを八、二八〇本、スギを

三〇〇本植栽したほか、周辺部や林道沿いにサクラ等の広葉樹を四八七本植栽しました。そして、幼樹のうち

は社員ボランティアと森林組合との共同作業で、また植栽五年目以降は森林組合に作業を委託する形で下刈りや枝打ち、除・間伐等の作業を

実施しました。

平成一八年からは、新たな森林づくり活動として『タカシマヤ一粒のぶどう基金』を活用した森林づくり

活動を開始しました。『タカシマヤ一粒のぶどう基金』は、高島屋が保有していた資産の一部を従業員のための基金として拠出したもので、そ

— 『タカシマヤ一粒のぶどう基金』とは —

「昔、病床に伏した子どもが、明日をも知れない症状のなかで、両親に葡萄が食べたいと希望した。しかし、そのときは葡萄が産する季節ではなく、どこにも葡萄が売られていない。親は思案の挙句、高島屋に来て葡萄が陳列されているのを発見したが、とても買える金額ではない。思い悩んで帰ろうとするところを販売員が見つke、一粒なりともおわけしましょうと提案し、その子に念願の葡萄を食べさせてあげられた」という逸話に習って、いかなるときも、お客さまの身になって対応しようという精神を受け、命名されています。



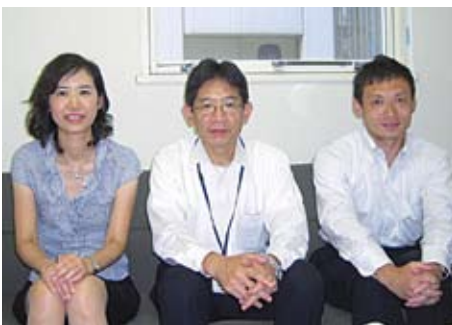
タカシマヤ一粒のぶどう基金による植樹風景

の運用益を従業員が参加する環境保全活動や地域貢献活動、福祉・介護といった様々な社会貢献活動に利用するものです。全社で取り組む中央事業として毎年、長野県茅野市で植樹活動を行うほかに、店舗ごとに展開する支局事業として様々なボランティア活動を実施しています。

『タカシマヤ一粒のぶどう基金』の中央事業として実施される植樹活動は、保養所がある長野県茅野市内の北山柏原財産区との間で森林の里親契約を締結しています。『タカシマヤ一粒のぶどう基金』のボランティアは、白樺湖に繋がる街道沿いにおいて、地元の方々の指導のもと、春にはサクラを中心とした植樹活動を、秋には間伐や下刈り作業を行い、毎回、全国の店舗から五〇名程度の社員が参加します。地域との交流が進み、地元の方からも好評を博しています。

年間延べ二億人が来店する百貨店事業では「エコライフスタイルの提案」もCSRの取組として実施しており、環境配慮商品への積極的な販売を従来以上に強化しています。中でも、一〇年前にスタートした環境配慮商品「クリーンローズ」は、高

島屋独自の六つの基準に基づき、これまで約三百品目を選定しており、今後もさらに拡大していく予定です。加えて本年からは、お中元やお歳暮をもらった人がカタログギフトから商品を選ぶ際に、国連世界食糧計画(WFP)や森林を育てるNPOなどへの寄付が出来る「社会貢献ギフト」の取り扱いを開始するなど、幅広いサポート活動を展開しています。



高島屋グループの担当者
左から高島屋前CSR推進担当の細川さん
高島屋スペースクリエイツの藤森さん
高島屋人事部の桐林さん